

中川米造における思想形成過程について

滋賀医科大学名誉教授 友吉唯夫

キーワード：

中川米造	Yonezo Nakagawa
植民地支配下朝鮮	Korea under Japanese Colonial Policy
松江高校	Matsue High School
高橋敬視	Keishi Takahashi
澤瀉久敬	Hisataka Omodaka
フランス哲学研究会	Salon of French Philosophy
ジョルジュ・カンギレム	Georges Canguilhem
731部隊	731 Corps

私は日本保健医療行動学会の会員ではないが、2009年11月7日、滋賀医科大学においておこなわれた中川米造追悼記念シンポジウム「医療の原点を振り返る～癒しの医学～」に発言の機会を与えられた関係で、寄稿を求められた。実はこの時期（2009年10月30日～11月30日）に滋賀医科大学図書館で開催された「中川米造回顧著作展——“医”とは何かを問い続けて——」が発行した記念誌に、私の旧稿『中川米造先生の医学観——想い出と追悼——』（からだの科学1998年、199号、pp. 94～97）が発行元の日本評論社の許可を得て掲載されており、ここではその内容と重複する記述は避けて、当日の発言内容を中心に綴りたいと思う。

中川米造先生（以下中川とする）は、1949年京都大学医学部を卒業して耳鼻咽喉科医師たることを志したが、途中で医学概論に転じ、それを深め、そして広めた。医学概論の学問的基礎を成すものは哲学であり、その実践的基礎となるのは人間愛であった。中川においてはこの両者が表裏一体となって強固な学問的根幹が樹立され、それに枝葉がのび、豊かな果実をもたらしたのであった。

思想形成にはその人の生育過程や受けた教育が少なからず影響を与える。中川においてはどうかであったか。中川は日本の植民地であった旧朝鮮のソウルに生まれ（1926）、米穀問屋を営む富裕な家庭に育ち、そこで旧制中学を終える。中川は、日本帝国主義による植民地支配下の朝鮮民衆の苦悩をつぶさに見聞したに違いない。皇民化教育を強制される被圧迫の人びとを見た目が、人間愛的なまなざしに転化したのであろうか。1990年に天皇代替りで大嘗祭がおこなわれることに反対する氏名入りの意見ポスターが2つの学者・有識者団体から出たが、そのどちらにも中川米造の名が見られたのも、神権天皇制による朝鮮民衆の弾圧を目のあたりにしたことがその背景にあったにちがいない。

中川は旧制中学から旧制松江高等学校に進むことにより（1943）、はじめて日本本土での教育を受けることになる。当時は戦時中で若者を軍隊に送り込むために旧制高校の修業年数が3年から2年に短縮されていた。しかしこの松江高校で中川は思想形成の基礎を築いたと思われる。哲学担当の高橋敬視という優れた教授のインパクトのある講義が有名であった。『西洋哲学史講義』、『概説西洋哲学史』といった立派な著作もあり、進歩的な哲学者であった。この高橋教授の存在が、中川に哲学的思想を芽生えさせたと考えてよいであろう。

中川の哲学への傾倒は、京大病院の医師から大阪大学医学部の医学概論教室に転じ、澤瀉久敬教授の門下生となることによって決定的となる。澤瀉久敬（以下澤瀉とする）は中川と異なり、哲学から医学へ接近した学者である。14歳年上の兄が万葉集研究で有名な澤瀉久孝である。1929年京大文学部哲学科を卒業したが、この年にのちに師事することになる九鬼周造がフランスから帰国した。大学院を経て九鬼の奨めでフランスに留学し、1937年に帰国している。1941年に大阪大学医学部に新設の医学概論講座に招かれ、1948年文学部が創設されたので、その哲学第一講座教授となり1968年に定年退官となるが、それまで医学部で医学概論の講義を継続したのである。哲学者としてはベルゲソンに始まるフランス哲学が専門であり、そこへ医学概論、生命哲学、科学哲学も研究領域にとり入れたのであった。

中川が澤瀉教授のところへ入門したということは当然フランス哲学の世界に身を置くことであり、フランスの思想書にも接することになる。中川はフランス語

を一から勉強したのであろうか。旧制松江高校でフランス語を修得した可能性は皆無ではない。しかし当時医学志望の高校生に課せられた第2外国語はドイツ語であった（いわゆる理乙）。理科丙類を設けてフランス語を教える高校は、大阪高校など限られていた。中川は京大耳鼻咽喉科学教室在籍時にフランス語の原著論文を出している。これはかなりの語学力があって可能なことである。フランス語をいつ、どこで修得したのか。いずれにせよこの語学力を有していたことがフランス哲学者の澤瀉へのアクセスを容易にしたのではなかろうか。フランス語はまさに中川と澤瀉を結合する触媒のようなものであった。そしてそのことを実証するような学問的展開がみられることになる。

澤瀉はフランス哲学研究会なるものを発足させ、主として関西在住の研究者を集めて、バルグソン以降のフランス哲学者の思想を分担して勉強してもらい、それをまとめたのである（1970）。いわば京大人文科学研究所で桑原武夫教授の指導のもとに成果をあげた共同研究に近いものであった。

中川も当然この現代フランス哲学の研究に参加したのである。中川がとりあげたのは、ジョルジュ・カンギレム（Georges Canguilhem 1904～1995）という科学哲学者である。カンギレムはとくに医学を中心とした生命科学の認識論を専門とする人であるが、哲学、医学両方の専門教育を受けたのちに生命哲学の研究を始めたという経歴にも、中川が親近感をもってとりあげた思想家であった。

中川によれば医療技術は生命にとって味方であるときばかりではない。逆に生命を損なうことがあるのである。その意味で医療が生命操作という概念で語られるが、生命操作の負の面を代表するものとして、中国黒竜江省ハルビン近郊に設けられていた関東軍防疫給水部（731部隊）の非人道的な研究に対して、中川は批判を加えていた。とくに京大医学部出身者がこの研究施設の枢要部に多くのポストを占めていたことから、京都で日本医学会総会が開催されたとき、731部隊をテーマにした充実した展示会を企画した。ところが自己批判を好まない総会本部の理解と協力が得られず、非常に矮小化されたものになってしまい、中川はくやしい思いをさせられたのであった。

人間愛の医療哲学者中川米造はつねに日本の医学界に警鐘を鳴らしつつ足跡を残してきた。それは大きく、そして長いものであり、いつまでも消えることがな

中川米造における思想形成過程について

い。しかしもう伸びることはない。「この問題を中川先生ならどう認識され、どう応答されるだろうか」という発想をする人がいる限り、中川米造はわれわれの世界で生き続ける。しかしその存在と非存在のあいだの深淵に悲嘆することの多いのもまた事実なのである。